KIITO NEWS & TOPICS

「男・本気のパン教室」メンバー再集結！

昨年10月に開催した「LIFE IS CREATIVE展」で結成した、50歳以上男性限定「男・本気のパン教室」メンバーが再集結！ 3月12日の「オープンKIITO2016」で腕を振るいました。当日は焼きたてのパンを目当てに、行列ができるほど。計100食のパンがあっという間に完売しました。KIITOでは「男・本気のパン教室」第2弾を計画中。これからもぜひ注目してください！

撮影：芦田博人

「オープン KIITO2016」関連企画

男・本気のパン教室　手作りパン販売

→ 2016年3月12日(土) 場所：KIITO 4F

子どもたちと、医療や科学のはてなを解決

子どもたちやその親世代へ向けて、ポートアイランドにある神戸医療産業都市をPRするイベントを神戸ハーバーランド・umieで開催しました。iPS細胞の展示や、医療や科学にまつわるクイズスタンプラリー、自分の細胞を顕微鏡で観察するワークショップなど、体験・参加型のプログラムを通して、神戸医療産業都市について楽しみながら学んでもらいました。KIITOのゼミから生まれた企画です。

神戸医療産業都市　こどもはてなラボ

→ 2016年3月19日(土)、20日(日)
主催：神戸市　企画運営：デザイン・クリエイティブセンター神戸
協力：理化学研究所　多細胞システム形成研究センター(CDB)
理化学研究所　ライフサイエンス技術基盤研究センター(CLST)

等身大の「週末田舎暮らし」

平日は都会で働き、週末は田舎で暮らす。「旅行」や「別荘暮らし」とは違う、もうひとつの住まい方を実践する馬場未織さんをお迎えし、「二地域居住」の可能性について考えます。そこに至るきっかけから、里山での子育てや都市農村交流など、日々の暮らしで気づかれた新たな視点に加え、神戸における二地域居住の可能性についてもお聞きします。

未来のかけらラボ vol.8

トークセッション「二地域居住から見えてくるもの」

→ 2016年5月25日(木)　19:00～20:30
参加費：500円(1drink付き)、要申込・定員40名(先着順)
講師：馬場未織(ライター、NPO法人南房総リバブリック理事長)
モデレーター：芹沢高志(デザイン・クリエイティブセンター神戸 センター長)

パスタランチはじめます

毎週水・木曜日限定、野菜たっぷり・副菜充実の週替わりランチが評判を呼ぶKIITO CAFE。この春から、第2、第4金曜日にはパスタランチをはじめます！ナポリタン、ペペロンチーノ、カルボナーラなど定番のものから、季節の食材を取り込んだ旬のメニューまで、バリエーション豊富に提供していきます。どうぞお楽しみに！

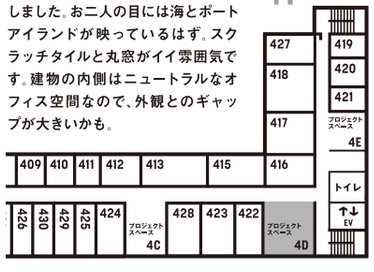
KIITO CAFE

→ 火～金　12:00～19:00
パスタランチ：700円(第2、第4金曜日限定)
※臨時営業スケジュールやメニュー詳細はfacebookでお知らせしています

COVER STORY

撮影場所：プロジェクトスペース 4D の窓

海側に面する窓から顔を出して撮影しました。お二人の目には海とポートアイランドが映っているはず。スクラッチタイルと丸窓がイイ雰囲気です。建物の内側はニュートラルなオフィス空間なので、外観とのギャップが大きいかも。



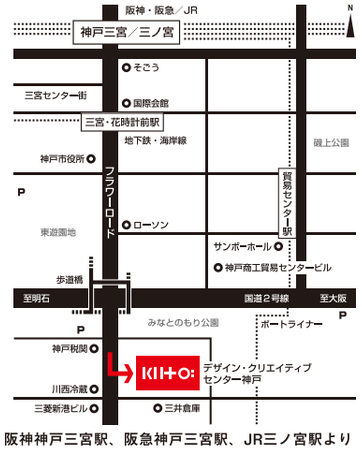
→ クリエイティブラボに挟まれた、ラボ入居者向けのミーティング等に使えるスペース。

KIITOの住人と

411号室　studio moka
紙野永子さん、森本海さん

3月12日の「オープンKIITO2016」でのスノードーム作りワークショップが大人気だったstudio mokaさん。従妹同士で小さめの一室をシェアアトリエ利用し、絵画制作や雑貨のデザインを手がけています。揃って留学経験あり、その後も何回も通うほどのイタリア好き。室内のそこかしこに(＋白衣にも！)イタリアがあふれています！

ACCESS



阪神神戸三宮駅、阪急神戸三宮駅、JR三ノ宮駅よりフラワーロードを南へ徒歩20分、
国道2号線を越えた神戸税関東向かい。

神戸市営地下鉄海岸線三宮・花時計前駅より徒歩10分
ポートライナー貿易センター駅より徒歩10分
※駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。

KIITO NEWSLETTER VOL.013　by DESIGN AND CREATIVE CENTER KOBE

2016年2月発行　発行：デザイン・クリエイティブセンター神戸
編集：竹内厚[Re:S]／アートディレクション・デザイン：寄藤文平+北谷彩夏[文平銀座]
写真：飯川雄大(p.1、p.2～3の4,5)

CONTACT　〒651-0082 神戸市中央区小野浜町1-4　TEL：078-325-2235　FAX：078-325-2230　E-mail：info@kiito.jp　URL：http://kiito.jp

KIITO

TAKE FREE VOL.013

女性の話。

批評家、キュレーター
竹内万里子
×
写真家
長島有里枝

［キイト］デザイン・クリエイティブセンター神戸 季刊誌 KIITO NEWSLETTER VOL.013

Photo by Takehiro Iikawa

DATA 長島有里枝 アーティスト・トーク
「女性の話/about women」
（2016年3月26日開催）

INFO 成果発表展
「縫うこと、着ること、語ること。」
6月17日（金）〜7月24日（日）

写真家 長島有里枝 Yurie Nagashima × 批評家、キュレーター 竹内万里子 Mariko Takeuchi

KIITO: SPECIAL TALK

昨年の10月から、KIITOアーティスト・イン・レジデンス招聘作家として神戸で制作してきた長島有里枝さん。大学時代に家族とヌードで撮影したデビュー作がスキャンダラスに捉えられたことや、90年代に広まった「女の子写真（ガーリーフォト）」ブームへの違和感を同じように感じてきたという、竹内万里子さんをゲストに迎えてのトークショーが開催されました。長島さんの作品を時系列で振り返りながら行われた濃密なトークから、その一部を再編集して掲載します。

女性もまた女性に対して気づいていないこと

長島　この10年くらいかな、大学でフェミニズムを専攻して修士課程を終えたりもして、女性といっしょに仕事をしたり、女性のクリエーションについて考えるような作品を作ってきました。竹内さんとはお互い写真の仕事をしていて、あらたまって「女性について」みたいな話はしてこなかったけど、竹内さんならわかってくれるんじゃないかとは思ってたんです。

竹内　有里枝さんと私はほぼ同い年なんですね。知り合ったのはかなり昔ですけど、2010年に『SWISS』という作品集を出されたときに、日々問題だと考えていることがこんなにも近かったんだと盛り上がりましたね。

長島　そうでした。『SWISS』というのは、私の祖母が撮っていた花の写真をスイスでの滞在制作に持っていって生まれた作品で、祖母は、庭仕事で育てた花の写真を何枚も撮っていたんですね。ある時、それが遺品として出てきた。女学校を卒業して、お見合い結婚で主婦になった彼女の制作への情熱、執着心みたいなものが感じられる写真でした。彼女が主婦で、私が写真家と呼ばれる立場にいることは、彼女にはなかった才能が私にあったからではないんだと思いました。時代や社会的な背景、生まれ育った環境など、自分ではまったく選べない理由によって、彼女は写真家ではなく主婦だったわけです。本当にそのチャンスすらなかったということに気づいて、愕然としました。

1

竹内　『SWISS』は、そうしたおばあさまの花の写真と、子どもを育てている女性である有里枝さんの誠実な言葉が絶妙に織りこまれた本でした。有里枝さんが子どもを持ったことも、ひとつの転機となって生まれた作品ですね。

長島　結婚して2年は、子どももいなくて、彼との関係性も恋人の延長で楽しかったんですけど、子どもができたら急に生活としてうまくいかなくなった。子育てにかぎらず、親の介護であるとか、家の家事なんかも含めてケア・ワーク、あるいはシャドウ・ワークといいますけど、それはお金にならない仕事だし、延々と続きます。それを家庭で請け負っているのは、ほとんどの場合女性です。私も、子どもを産んだ瞬間から、子育てから家のことまで全部やって、寝る時間を削って自分の作品を作らなければいけなくなって、何だこれ!?って実感したわけです。

2

竹内　上野千鶴子さんが「子ども、病人、障害者、高齢者など、依存的な他者をかかえこんだときに、ほとんどありとあらゆる『おんなの問題』と呼ばれるものが発生する」と言っていて、まさにそのとおりだと膝を打ったことがあります。私は有里枝さんと違って、子どもを産んだのがかなり遅かったので、子どもを持たない女性として仕事をするという人生を引き受けてきました。ところが、40代で子どもを持ってはじめて、世の中の活動、仕事、制作というのは、シャドウ・ワークを誰かに押しつけることによって成り立っていたということに気づいて、それまで無自覚で無知だった自分をすごく恥じました。

長島　その気持ちはわかる気がします。高校生の頃、母みたいになりたくないという気持ちがあって、〝でもお母さん、働いてないじゃん〟みたいになると、〝でもお母さん、働いてないじゃん〟みたいなことを言うわけです。女である自分の中にも、どこかで主婦としての人生に対する蔑みがあって、母とは違う人生を選んだつもりでしたが、これはダメだと思った。母のせいじゃないな、と。

竹内　女性が女性の権利を主張するのがフェミニズムだと誤解されていますけど、女性もまた、たとえば子どもを抱える女性のことについて無知でいたり、あるいは、それが女性だから自然なことなんだという言説に無自覚に飲み込まれて葛藤しているという話でもあって、それがずっと長く続いてきたというのが現状ですね。

母との制作、神戸での制作

竹内　東京での個展「家庭について／about home」は、有里枝さんがお母さまと作られたテキスタイルのテントが置かれた、インスタレーション展示でした。

長島　私はもともと母と折り合いが悪く、会ったらすぐに喧嘩になるんです。だけどこの先、まだ考えたくはないけれど、たとえば母の介護をすることになったとして、うまくやっていけないんじゃないかという不安を感じていました。だから、もっと母のことが知りたいし、いきいきと好きなことに打ち込む女性としての姿が見たいと思いました。母は私立の女子校を出た後、パリでお針子になりたいと洋裁学校に通っていた時期があって、結局、父と結婚をしたので、パリに行くこともなく、学校で身につけた裁縫の技術を、ただ家族のために無償で提供するということを繰り返してきました。制作にあたっては、母というより技術のある職人として、母に縫う役目を委ねて、いっしょに4カ月くらいかけてテントを制作しました。母と私が捨てられないでいる大量の衣類や古着、カーテンや破れてしまったドレスなんかを並べて構成したり、型紙を起こしたりするのは私がやって。

3

竹内　ある種、実験というような試みだったと思いますけど、実際にお母さまの得意とする技術に頼る形でともに制作をしてみて、どんな変化がありましたか。

長島　それがね、結局、終わったらなんにも変わってない気がするんだけど（笑）。ただ、母との辛い過去の記憶が忘れられないように、こうしていっしょに何かを制作したという記憶は一生残ると思うし、この先まったく同じ日々が続くように見えたとしても、その記憶があるのとないのとでは違っていると私は思っています。それと、母はプロにはならなかったけど、洋裁学校に通って身につけた技術があることは、彼女の中でプライドになっていることも感じました。その技術を持たずに主婦になるのとでは、生活も違っただろうなと。

4

竹内　有里枝さんを写真家としてだけ見ていた方にとっては、こうした作品の展開は予想外かもしれないけど、やっぱり重要なことは、これが女性の話であって、歴史的にも女性と根深く結びついてきた衣類や裁縫で語られていること。ただ悲劇的なモチーフとしての裁縫、虐げられてきた女性といった単純な話ではなくて、さまざまな角度から女性を考える作品になっているんですね。そして今回、KIITOでの滞在制作でも神戸に暮らす女性の古着を集めて、制作を進められていると聞きました。

5

長島　母との制作はとてもパーソナルなもので、母娘の関係を仕事上のパートナーという関係にスイッチしたときに、何が起こるのかを知りたくて制作した作品ですけど、神戸でやっているのは、もっといろんな女性の話が聞きたいっていう、外に向かう気持ちから制作しているものです。お会いした女性の捨てられない服にまつわる思い出を聞いてから、その服をまとったポートレイトを撮っているんですけど、思い出話にはやっぱりお母さんのこともよく出てきます。そうやって人の話を聞くことは、〝ああ、私だけじゃなかった〟と思いたいという気持ちもありますし、自分が何かを乗り越えていく力にもなるんだろうと思います。

竹内　一貫して女性をめぐる問題に対してこられた有里枝さんの新作、とても楽しみです。

長島　まだ不確定要素も多いですけど、今のところ、すごくいい感じですよ。

構成：竹内厚

[photo] 1：© Yurie Nagashima | 2、3：神戸での取材風景 | 4、5：トーク開催時の様子

長島有里枝 写真家

1973年東京生まれ。1993年、武蔵野美術大学在学中に制作した作品が「アーバナート#2展」でパルコ賞を受賞、写真家として注目を集める。1999年、California Institute of the Arts MFA修了。2000年、写真集『Pastime Paradise』（マドラ出版）で第26回木村伊兵衛写真賞受賞。2010年、初のエッセイ集『背中の記憶』（講談社）で第23回三島由紀夫賞候補、および講談社エッセイ賞を受賞。写真集に『SWISS』（2010, 赤々舎）、『5 comes after 6』（2014, bookshop M）など。

竹内万里子

批評家、キュレーター、
京都造形芸術大学准教授

1972年東京生まれ。2008年フルブライト奨学金を受け渡米。同年「パリ・フォト」日本特集ゲスト・キュレーターを務めた。国内外で講演を行う他、多くの作品集や新聞雑誌等に寄稿。主な共著に『鷹野隆大 1993-1996』、志賀理江子『螺旋海岸 | notebook』、オサム・ジェームス・中川『GAMA CAVES』、新井卓『MONUMENTS』など。訳書にジョナサン・トーゴヴニク『ルワンダ ジェノサイドから生まれて』がある（同作品の日本巡回展も企画）。

Q7 2人の頭の中をちょっとだけ覗き見する質問。どんな違いが出るでしょうか？

Q1.神戸の思い出　Q2.手放せないもの　Q3.最近気になること　Q4.最近驚いたこと　Q5.心の名作　Q6.KIITOでやってみたいこと　Q7.これからの予定

長島有里枝さんのAnswer | A1.これから時間をかけて | A2.コーヒー | A3.フルーツジュース | A4.ドナルド・トランプ | A5.リディア・デイヴィス『ほとんど記憶のない女』（白水社、2005年） | A6.もうさせてもらっている | A7.本を何冊か出版予定

竹内万里子さんのAnswer | A1.あいにく思い出といえるようなものはありませんが、亡父が少年時代を過ごした土地なので、漠とした思い入れはあります | A2.できれば手放すよう心がけています。本当に大事なものは帰ってくるから | A3.この国の行方。世界の行方 | A4.ドバイ近郊の砂漠で、ラクダの親子がまるで奈良の鹿のように自由に歩いていたこと | A5.映画「動くな、死ね、甦れ！」（ヴィターリー・カネフスキー監督、1989年） | A6.身近な写真を用いた対話型ワークショップ | A7.日本の女性の写真家を紹介するウェブサイトを構想中